



IYUS通信

2020年10月発行 2020秋号

秋麗の候、会員および関係者の皆さまには、益々御清栄のこととお慶び申し上げます。

また、日頃は、当会の事業に多大なる御理解、御支援を賜り、心より御礼を申し上げます。

本年は、年頭より新型コロナウイルスの感染・拡大の影響やその防止策のため、種々の行事が中止となっております。IYUSにおいてもスタディツアーをはじめとする研修会やその他の行事も中止することとなり、結果、年間活動の根幹である団員の募集そのものが中止となりました。

同じように、卒団生や経験者である青年が中心となって企画運営される社会貢献活動のヤングサンタ事業も、実行委員会の開催自体が休止するなど、企画・検討や準備に入ることができなくなっていました。

新型コロナウイルス感染症の国内の新規感染者数の変動については、多少の減少が見られようにもなってきました。しかしこの数値変動については、実際に感染拡大を制御できたのではなく、一定以上の活動自粛や、いわゆる「三密」の回避、マスクの着用や手指消毒などに努めた、私たち一人ひとりによる防御の成果でしかありません。少しの油断が、次なる感染拡大を起こしても何ら不思議ではない状況であることには変わりはありません。

これから、季節型インフルエンザの感染拡大にも注意が必要な時節となってきました。皆様方におかれましては、今まで以上、一層健康に留意され、風評等に惑わされることなく、過ごされますことを心から願っております。

2020年度ヤングサンタ

今年度の開催に関して実行委員会では、スタッフの確保や、少人数であっても各家庭を訪問することの是非など、従前どおりの実施は困難と考えています。

しかし、今回のコロナ騒動で我慢を強いられ、その理由についても十分に理解がしがたい年齢層の子どもたちに、せめてクリスマスを楽しんでもらいたい。そのためにはどのような方法であれば実施できるのかを検討してきました。

現在検討中のプランでは実際にサンタさんはお宅訪問をせず、映像で訪問します。画面をとおして、今までと同様に、一緒に「何か」を作ったり、歌やダンスなどをします。また、絵本の読み聞かせや激励メッセージの読み上げなどを行うこともできます。





そして映像の中のサンタさんから「メッセージカードやプレゼントは〇〇にあるから見てごらん」と呼びかけ、実際に子どもたちがそこにあるのを見つけることで、「会うことはできなかったけどサンタさんは来てくれた」と思ってもらえるような方法が提案されました。

まだまだ、実際に実施可能かどうかについて、「放映作業」のための「技術スタッフ」や、どのような「資器材」が必要なのか、事前に家庭に届いていないといけない製作キットやカードなどの「物」の準備にどれくらいかかるのか等々、検証していかなければならない課題が多数ありますが、新たな時代の新たな「ヤングサンタ」をめざして検討してまいりたいと思います。



2021 年度の活動方針について

I Y Sの活動について、色々とお問合せをいただきます。事業計画については、4月に行われる会員総会において、会員も皆様の承認をいただくこととなりますが、その準備作業として、12月頃には活動計画の骨格を創り上げ、予算や各種の申請手続きを行う必要があります。

I Y Sの主要な事業と言えば、青年育成としての団員活動であり、その中核をなすのが海外派遣事業になります。しかしながらまったく未経験で右往左往することとなった、このコロナ禍について、来年の夏の状況の予想などできうるものではありません。

明年夏には東京オリンピック・パラリンピックが予定されています。併せてそれによる多数の人の出入国が予想されます。一般の海外渡航についても同様に復活するかもしれません。しかしその条件として、今現在と同様の渡航先や帰国後での「入国後の自主隔離」等があった場合の時間的負担はかなり膨大なものとして降りかかってきます。



「わざわざ海外に行かなくても、日本にも多くの外国人が暮らしているし、インターネット等を通じて海外との交流はできるのではないか？」これはI Y Sの海外派遣に対して、よく言われる言葉の一つでもあります。確かに国内にいながらでも、当事者（外国人）の話を聞くことで交流や学びになり、効果のあることでもあります。しかしここで足りないのは「体験」という事になります。

I Y Sの活動目的には「人権意識と国際感覚を身に付けた青年の育成」にあります。ここでいう「国際感覚」には単に「海外について詳しい」というのではなく、いずこの地に暮らす人であろうと、ある意味で「国」や「民族」、「人種」という概念を取り払い「一人の人」として対することができるとともに、逆に、「国」や「地域」、「民族」ごとに異なる文化が存在する意義を理解できる、多様性を感性として身に付けることにあります。

そのためにも最大に効果があるのは「体験」であると考えます。



I Y Sの海外派遣では海外の地の、それも観光地化されていないようなところへ伺います。時と場合によれば、奇異な目で見られることもあります。私たちは無条件に「圧倒的なマイノリティ」です。

当然、事前の研修で時間をかけて派遣先のことを学び、個人テーマを決めることでさらに学習して現地に臨みます。

しかし、実際に現地に行くと、それまでに学んだことや調べたことは、ほんのわずかの部分でしかないことに気づかされます。その体験が重要であると考えます。

「聞くだけなら、忘れてしまうだろう。」

「見たら、覚えるだろう。」

「行動すれば、学ぶだろう。」

「自ら気付けば、使うだろう。」



この考え方が、私たちI Y Sが掲げるすべての活動の基本理念です。

人は、「聞く」だけでは、やがては忘れてしまいます。「見る」と印象には残りますが、それだけでは他人事で終わってしまいます。だからこそ、自ら「行動する」ことによって得られた学びを大切にして、その時の新たな「気づき」が、さらにその後の自らの行動に反映され、結果的には相手にも好影響を与えることができると確信しています。



以上の観点から、2021年度の活動において、計画上は以前と同様の事業計画を提案させていただくこととなりますが、状況に応じて本年度と同じように柔軟な対応を行ってまいりたいと思いますので、なにとぞ御理解のほど、よろしくお願いいたします。



卒団生の活躍

前身であるIYYから含めると400人を超える「団員経験者」がいるIYSですが、時に「現在の活動状況」などを連絡いただくことがあります。

今回連絡をいただいたのはIYS第10期のWさんです。(Wさんは教員職の方ですので、以下、W先生とさせていただきます。)

W先生は、ミャンマー連邦共和国の日本人学校に、文部科学省の在外教育施設派遣教師として、この4月に派遣予定でしたが、「新型コロナ騒動」で渡航は延期になり、現地の生徒も、日本へ帰国する家族があったり、双方で入国が中断されたりで、みんなが集まらない状況になってしまいました。

ということでW先生は日本にいる状態のまま「就任」し、実際に行っているのがオンライン授業です。W先生は授業を進める中で、現地では手に入らない、「生の日本の情報」を教材にすることで、オンライン授業を「強み」に変え、特に社会科の授業では、百舌鳥古市古墳群の紹介などで、「堺市」を教材に取り入れて進めており、今回「市役所の仕事」をテーマにした授業を行うとの連絡をいただき、6月の某日、授業の現場にお邪魔してきました。



市の職員さんから「市役所の仕事の概要」などの話、教育委員会の職員さんから「教育委員会や日本の学校について」の説明と続いて、特別ゲストとしてお越しいただいたのが「ハニワ部長」。堺に縁のある私たちでも、正直やっと最近見慣れてきた感のあるハニワ部長ですが、「さすがに」というか「やはり」というか、ミャンマーの日本人学校では、知っている人はほとんどおらず、「しばしの沈黙」が起りましたが、さすがは「ハニワ部長」！、楽しく生徒たちを引き込んでお話をされていました。



今回の授業を見せていただいて、授業中に交わされるやり取りなどから、現場には行くことができていないにもかかわらず、W先生の生徒さんたちに対する熱い想いの伝わってくる授業でもありました。

授業後、W先生は「できなくなった事をぼやいたって始まらない。こんな時だからこそ『今できる事』を見つけるチャンスだと考えています。子どもたちにもそういう風に教えていきたいですね」と言っていました。今もまだ、渡航のめどはたっていないそうですが、さらに工夫を重ねながら、授業を続けているそうです。

皆さんも、今回の「コロナ騒動」で「いつもと異なる」、「未経験の事態」に遭遇されてこられて、これからもまだまだ「予測不能」に振り回されるかもしれませんが、自分自身を見失わず冷静に対応してまいりましょう。